

埼玉県IPM実践指標(施設イチゴ) (平成20年度策定、令和2年9月改定)

管理項目	管理ポイント	チェック欄			
		点数	昨年度の実施状況	今年度の実施目標	今年度の実施状況
親株の準備	親株は、防虫ネット等でアブラムシ類の飛来を防ぐとともに、健全苗を十分量準備する。	1			
	親株用の苗を仮植えする場合は必ず無病地を選ぶ。	1			
	萎黄病の発生が疑わしい株は使用しない。	1			
	炭疽病の潜在感染の疑いが持たれる場合は簡易検定を行って無病であることを確認する。	1			
採苗期・育苗期の管理	空中採苗方式やポット育苗、高設採苗、隔離床による無仮植育苗など、省力的で病害虫防除のしやすい技術を取り入れる。	1			
	萎黄病、炭疽病などの発生のないほ場を選ぶか、予め土壤消毒を行っておく。	1			
	炭疽病の対策には、雨よけ栽培を基本とする。	1			
	高温の影響を少なくするためできるだけ好天時は開放できる型の施設が望ましい。	1			
	病原菌の飛散や植物体への付傷を避けるため、強い灌水を避けて、点滴(ドリップ)灌水等を利用する。	1			
	病害の発生を抑制するとともに、健全な根系発達を促すため、ほ場の排水対策を十分に実施する。	1			
	炭疽病・萎黄病・うどんこ病等、各種病害の発生に注意して観察し、適切な予防散布を実施する。	1			
	うどんこ病対策のため、夏季の育苗期間中には葉搔きをこまめに行う。	1			
	炭疽病や萎黄病の発生を認めた場合は、放置せず速やかに処分する。	1			
	気門封鎖型の薬剤など、天敵に影響の少ない剤を組み入れて害虫防除を徹底し、害虫類の寄生していない苗を確保する。	1			
薬剤抵抗性害虫の発現を防ぐため同系統の剤は多用しない。	1				
訪花昆虫や天敵などに影響を及ぼす日数が長い剤は注意して使用するか使用を避ける。	1				
省力的管理	省力・軽作業で実施可能な連続うね利用栽培と局所施肥、太陽熱利用の土壤消毒法を行うと、環境負荷低減効果も期待できる。	1			
定植時の病害虫防除	適切な時期に定植を行う。アブラムシ類防除には粒剤を植穴処理する。	1			
	本圃に持ち込む前に、高濃度炭酸ガス処理を実施する。	1			
保温開始前の病害虫防除	ハダニ類やハスモンヨトウなどに対する薬剤防除を徹底し、ビニル被覆後にこれらの害虫を持ち込まないようにする。	1			

保温開始直後の病害虫防除	ハダニ類の発生初期(天敵資材の導入前)に有効な薬剤を丁寧に散布する。	1			
天敵資材利用の害虫防除	ハダニ類の防除には、ミヤコカブリダニ剤の予防的放飼と、その後の定期的なチリカブリダニ剤の放飼を併用する。	1			
	アブラムシ類の防除に天敵資材(コレマンアブラバチ、10a 当たり1,000 頭を目安)利用する。	1			
	アザミウマ類の防除に天敵資材(アカメガシワクダアザミウマ)を利用する。	1			
微生物農薬利用の病害防除	育苗期からの予防的散布で定着させ、他の農薬と適宜組合せて、被害を回避する。施設の温風暖房のダクトを利用する方法も一部の剤で利用できる。	1			
生物農薬に影響の少ない化学農薬の選択	カブリダニ剤使用后、ハダニ類が増加傾向の場合は、カブリダニ類に影響の少ない気門封鎖型の薬剤や殺ダニ剤(ピフェナゼート剤又はシフルメトフェン剤など)を補完散布する。	1			
	アブラムシ類には気門封鎖型の薬剤、吸汁抑制型の薬剤または作物体への浸透性の良好な薬剤、アザミウマ類には昆虫生育調節剤(IGR剤)を使用する。	1			
その他資材の利用	開口部(側窓及び出入り口等)に防虫ネットや寒冷紗を使用し、施設のサイドには反射資材やダニ返しを用いて、害虫類の侵入を防ぐ。	1			
	黄色及び青色粘着板を利用して、各種害虫の防除やモニタリングを行う。	1			
雑草対策	施設及び育苗ほ場内外の雑草は害虫の発生源となる可能性が高いので、除草に努める。	1			
適正な肥培管理と窒素質肥料の削減	県の施肥基準に基づき、施肥量とその時期を設定し、適正な肥培管理を実施する。特に窒素肥料が過剰にならないようにする。	1			
病害虫発生予察情報の確認	病害虫発生予察情報の入手やフェロモントラップなどの予察資材を用いて発生動向を把握し、防除要否判断及び防除時期の決定を行う。	1			
農薬の使用全般	希釈倍率や散布量など、農薬登録の範囲内で可能な限り使用量を控える。十分な薬効が得られる範囲で最小の使用量となるよう、最適な散布方法を検討した上で使用量・散布方法等を決定する。	1			
	当該病害虫・雑草に効果のある複数の農薬がある場合には、飛散しにくい剤型を選択する。	1			
	農薬散布を実施する場合には、適切な飛散防止措置を講じた上で使用する。	1			
	農薬を使用する場合には作用機作の異なる農薬をローテーションで使用する。その際、薬剤のラベルにある「殺虫剤分類」や「殺菌剤分類」の番号・記号を確認する。これらがラベルに表示されていない場合、殺虫剤では IRAC コード、殺菌剤では FRAC コードを参照・確認する。さらに、薬剤耐性の発達が確認されている農薬は当該地域では使用しない。	2			
作業日誌	病害虫・雑草の発生状況、農薬を使用した場合の農薬の名称、使用時期、使用量、散布方法等、上述のIPMに係る栽培管理状況を作業日誌として別途記録する。	1			
		合計 点数			

